

## アチックの台湾パイワン族調査の 地を訪ねて

小熊 誠<sup>※</sup>

日本常民文化研究所には、昭和12年にアチックミュージアムで調査したパイワン族の写真と16ミリフィルムが残されている。場所は、屏東県のカピアン社である。2010年12月26日から29日の日程で、そこを訪れた。調査の目的は、戦前の写真とフィルムを現地の方に見ていただいて、その確認と現在の変化を明らかにしようとするものであった。

まず、屏東県泰武郷公所にうかがった。泰武公所では、古老の方（大正12年生）などに映像を見ていただいてインタビューした。公所には、カピアン社の新旧の集落地図が掛けられていた。1枚は、1938年の日本時代の集落地図である。2枚目は、1941年に山地から中腹に集落を移動させた時の集落地図で、双方とも各戸主の名前や頭目の家など、細かく記されている。村落調査の基本的な情報を得ることができる貴重な集落地図である。会所の2階にはパイワン族に関する民俗展示があり、参観した。この地域の伝統家屋で使われていた柱や壁が陳列されていた。それには、パイワン族独特の人や毒蛇の彫刻が施されている。その彫刻から、トーテムを学習するワークショップ用の部屋も用意されていた。そのほか、衣食住に関する民具などが豊富に展示されていた。民族文化の保存と教育に、台湾政府が力を入れていることがうかがわれる。

その後、カピアン社（佳平）が1942年に移動した集落跡を巡見した。泰武公所のある位置は、屏東の平野地帯から中央山脈に分け入る入口にあたる。そこから、山道を車で登っていく。いくつか尾根を越えて、数十分走ると長短の丸太

を右肩下がり16本立てて造ったオブジェに「泰武部落文化生態園区」という看板が掛けられていた。周囲の見晴らしはいいが、遠くに山々が幾重にも重なって見える。その奥は中央山脈の山々がまだまだ続き、かつてはこの奥にも多くのパイワン族など台湾先住民の集落があったはずだ。ここは、屏東の街から最も近いパイワン族の集落だったと思われる。昭和12年にここにきた宮本馨太郎たちは、そういう地理的な要因もあってこの集落に調査に来たのかもしれない、などと話しながら自動車道から集落に入る道を下っていく。

集落跡には、パイワン族独特のスレートでできた石造家屋が廃屋として残されていた。屋敷を囲ったスレート製の石垣は崩れて草が絡み、同じくスレートで建てられた家屋は屋根も崩れてそこに残されていた。ただ、頭目の家屋だけはきれいに復元されていた。パイワン族の伝統家屋を、それが建っていた現場で見ることができるのはとてもいい資料の保存方法だと思われる。しかし、そこは博物館施設ではないし、多くの人が見学に来るわけにはいかない。むしろ、そこに住んでいた泰武のパイワン族の人々の精神的拠り所となっているのかもしれない。これが、本来の物質文化の保存なのかもしれない。

従来のパイワン族の習慣は、家族が亡くなると家屋内の入り口近くに遺体を埋めた。今でも、廃屋に祖先が埋まっている。日本統治時代に当時の政府によって集落移動を強制された一つの理由は、この風習を止めさせることであった。しかし、現在、年に一度麓に移住した子孫たちが、この廃屋に戻ってきて、自分たちの祖先祭祀を行なっている。集落移動、葬制・墓制の変化、祖先祭祀の変化、靈魂観の問題などを含めて今後調査が可能だと思われる。

戦前の日本常民文化研究所の画像と映像資料をどのように地元に戻し、その現在を調査することによってそれらの資料がどのように生かされていくのか。継続して検討していく課題を発見した調査旅行だった。

※ 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科教授